

『太陽熱・石灰窒素法』現地の声

16年間同じ場所のハウスで 高い収量・品質のほうれんそう

わら+石灰窒素 三重県安濃町 中山三英子さん

品質がよく上値で取引される

2月の上旬、この日は、冬でも滅多に降ることのない小雪が舞い散る寒い日にもかかわらず、中山さんにJ A津安芸村支店川西出張所に来ていただき、お話をうかがった。

三重県安濃町は、西に有名な鈴鹿連峰につながる経ヶ峰、南に長谷山をかかえ、その裾野に広がるところに中山さんは住んでいる。美しい山と川、そして小鳥のさえずる大自然に満ちあふれている。

中山さんは農業にたずさわって42年、常にフレッシュアグリを唱えながら歩みつけ、その間、石灰窒素だけが、変わらず使用されている。当時、ご主人とともに、水稲(230a)、子豚1,000頭をはじめ、春から夏にかけては、きゅうり、トマト、なすの栽培と野菜苗10,000本を、秋から冬にかけては、キャベツはくさい、レタスを栽培してきた。

中山さんの野菜は「色、つや、味そして形がよい」と市場で大好評。いつも上値で取引され、毎日市場へ行くのが楽しみだったという。

「わが家では、一作ごとに堆肥と石灰窒素を必ず置くことにしている。これが品質をよくしている」とご主人。

「石灰窒素を愛しつづけて42年、いまは粒状になり、ずいぶん散布が楽になりました」と三英子さん

専業農家として、農業指導士のご主人と2人で、今では、水稲と施設でのほうれんそう、こまつな、しゅんぎくを周年栽培している。

普及センターやJ Aもビックリ

ハウスほうれんそうの周年栽培は昭和57年からで、年5作から6作も採っている。16年間も、同じ場所で、しかもハウスのなかで、最初と変わらない収量と品質を保っている。「連作をしているのに……」と、市場はもちろん、普及センターやJ Aのみなさんもビックリしている。

中山さんたちのグループは、毎月1回農協に集まり勉強会を重ねている。農協や普及センターのかた、市場のかたがたと、土をいたわる肥料設計の勉強をして、食べて安心な有機肥料を中心に使用することになっている。

それでも欠かすことのできないのは、なんといっても、肥料と農薬の役目を果たす“石灰窒素”である。

施設面積は1,500㎡。毎年8月には、石灰窒素と太陽熱で土壌消毒をしている。この方法が、連作障害を解消する秘訣だという。

「太陽熱・石灰窒素法」の手順は、10a当たり稲わら250～300kgと麦わら100～150kg、石灰窒素100～120kgを全面散布し、トラクターで混和、平地状態にして湛水し密閉する。途中、乾燥状況を見ながら、週に1回水張り(2～3回)する(除塩も含めて)。「この方法はとても簡単な作業で、とても楽です」と中山さん。

基肥としても石灰窒素を全面散布

中山さんたちのほうれんそうは、まさに無農薬栽培といえる。市場でも大変好評で、常に一束30円は高く買っていただけという。

石灰窒素の使用目的は、土壌改良、病害虫の駆除、窒素の補給、有機物腐熟の促進、pHの維持(酸度中和)である。

「太陽熱・石灰窒素法」のほかにも、基肥として植え付け約3週間前に、石灰窒素を10a当たり100～120kg全面散布する。ただし、季節によって多少変えるそうだ。

石灰窒素の肥効がきわめて長くつづき、ほうれんそうの収量はもちろん、色、つや、鮮度ともに抜群である。

臭化メチルがだんだん使えなくなるといわれているが、中山さんたちには心配がない。

今後も、「太陽熱・石灰窒素法」による土壌消毒と土づくりをつづけ、ほうれんそう、こまつなの周年栽培と冬作のしゅんぎく栽培に力を入れていくとのことである。

最後に中山さんは、「地球に、環境に、そして、人にもやさしい石灰窒素」に『21世紀にはばたけ』とエールを送ってくれた。

【日本石灰窒素工業会・平沢陽一】